

## 流動性の時代と知の好奇心

病院長 小 阪 真 二

今年度から専門医研修が始まりました。プログラム制であり、どのプログラムに入るか悩んだ初期臨床研修医もあるでしょう。早く専門医を取りたいという気持ちもわかります。しかし、今回の専門医制度は、今年度に始まった基本領域があり、その上にサブスペシャリティの専門医があるようですが、まだサブスペシャリティ領域は固まっていないようです。

専門医を取ることは、どれぐらいの価値があるのでしょうか。30数年前に卒業した私たちのころは、博士号をとり、医学博士になることにかなりの価値を感じる世代でした。しかし、最近は博士号よりも専門医に重点が置かれているようです。しかし、この専門医もいつまで価値があるかはわかりません。湯川秀樹の退官直前の講義で言われたように、「今役に立つと言われるものは、30年先には役に立たなくなる」ということになるかもしれません。

人生は、山あり谷ありで現在の初期臨床研修医がこれから30年以上医師をやっていく上では、いろいろな変化が待ち受けているでしょう。私の同級生は8人が呼吸器外科医を目指して入局しましたが、現在も呼吸器外科医として手術をしているのは3人です。それ以外は、開業医、呼吸器内科医、緩和医療医などいろいろな分野に変わっています。皆さんもご存じのように、ノーベル賞を受賞された山中伸弥先生もはじめは整形外科医を目指していたのです。

1992年までには太陽系以外の惑星は発見されていなかったが、2000年以降は月に1個のペースで発見され、2018年11月末では3,903個の惑星が発見されています。このことについて、惑星物理学者の井田茂教授は「何か劇的な技術革新があったわけではない。莫大な予算が投入されたわけでもない。みんなが信じきっていた常識が崩れ去っただけで、いきなり宝の山がみな目の前に現れたのだ。」と記しています。太陽系の惑星配列を標準として、その配列を説明する従来の惑星形成理論の上で惑星が存在しやすい場所を測定していたのが、太陽のような主星の近くに木星のような大きな惑星が存在できることがわかり、一気に惑星の発見が加速されたのだそうです。

専門医になって、医療をしていくことが目指す道だという大学医局が持っている常識も、これからの超高齢社会においてどこまで通用するかどうかわからない状態です。わからないことを自分の頭で考えながら、楽しんでいくという知への好奇心がこれから求められていくのでしょうか。